

## 7 PET-CTで疑われ、気管支鏡下肺生検で診断した血管内悪性リンパ腫の1例

吉澤 和孝(研)・小泉 健・森谷 梨加  
手塚 貴文・伊藤 和彦・塚田 弘樹  
佐藤 大介\*・五十嵐修一\*・新國 公司\*\*  
橋立 秀樹\*\*\*

新潟市民病院呼吸器内科  
同 神経内科\*  
同 血液内科\*\*  
同 病理科\*\*\*

歩行障害の精査目的で入院した52歳の男性。全身CTで扁桃腫大、縦隔リンパ節腫大、脾腫を認め、血液検査で、可溶性IL-2R高値であったためリンパ腫が疑われた。CTでは肺内病変は認めなかった。リンパ腫の精査目的で骨髓生検、ランダム皮膚生検、扁桃生検を行うも、異常細胞は認めなかった。病変の正確な部位を把握するため、PET-CTを撮影したところ、肺に異常集積が認められた。異常集積部位(S6, S8)を経気管支鏡的肺生検したところ、血管内悪性リンパ腫(IVL)の確定診断を得た。本症例では、胸部CTで異常を認めなかったが、PET-CTで肺に異常集積が認められ、同部位を生検する事により確定診断が得られた症例であった。診断の困難なIVLであるが、生検部位に苦慮する症例では、PET-CTを行い生検部位を決定することは早期診断に至るための重要な方法である可能性がある。

## 8 非根治成人ファロー四徴症に脳梗塞を発症した66歳女性例

三ツ間友里恵(研)・赤岩 靖久  
二宮 格・上村 昌寛・高橋 哲哉  
下畑 享良・西澤 正豊・和泉 大輔\*  
南野 徹\*・白石 修一\*\*・高橋 昌\*\*  
土田 正則\*\*

新潟大学医歯学総合病院神経内科  
同 循環器内科\*  
同 心臓血管外科\*\*

症例は66歳、女性。生下時より心室中隔欠損(VSD)を指摘され、25歳の妊娠時にファロー四

徴症と診断されたが、手術はしなかった。X年8月、左上下肢の脱力を主訴に当院救急外来を受診した。来院時には症状は消失していたが、翌日の頭部MRIにて右後頭葉皮質に拡散強調画像で高信号病変を認めた。心エコーでは、肺動脈狭窄およびVSDとそれに伴う左右シャントを認めたが、心腔内血栓はなく、脳梗塞の原因として、心房細動などの不整脈や凝固系の異常、血管狭窄やプラーク病変などは認めなかった。下肢エコーにて、深部静脈血栓を認めなかったものの、ヒラメ静脈の拡張があり、経頭蓋超音波検査で右左シャントを認めたため、奇異性脳塞栓症と診断した。無治療でのファロー四徴症の長期予後は不良であり、非根治の成人例における脳梗塞発症の報告は非常に少ない。本例は脳梗塞の発症機序と治療について考察しえた貴重な症例と考え報告する。

## 9 MRIにて左視神経病変と硬膜肥厚を呈したIdiopathic Orbital Inflammation Syndromeの1例

酒井 亮平(研)・関谷可奈子・石黒 敬信  
佐藤 大介・新保 淳輔・佐藤 晶  
五十嵐修一

新潟市民病院脳神経内科

症例は68歳、男性。数週間の経過で急速に進行する左眼の視力低下と左眼瞼部の痛みを認め、当院受診した。受診時、左眼は失明状態であり、眼底所見では乳頭浮腫と大血管の拡張を認めた。それ以外の神経局所徴候は認めなかった。

血液検査では軽度炎症反応や真菌抗原弱陽性を認めるのみであり、髄液検査では大きな異常は認めなかった。MRIにて視神経に選択的な造影効果と左蝶形骨縁の硬膜肥厚を認めた。

経過中、対側の右眼の耳側半盲が出現した。対側の失明を防ぐためステロイドパルス療法を施行し、右眼の耳側半盲は改善した。

検査所見や画像所見より悪性リンパ腫・真菌症・血管炎などが疑われたが、確定診断に結びつかず、診断確定のため左視神経生検を施行した。